

## しゃもじ、トルストイ、気球

長谷川新（インディペンデントキュレーター）

空き家、空き店舗、廃ビルの類を「再利用」したり、建て壊す直前の空白期を「有効活用」する企画が「メソッド」となって久しい。それぞれの巧拙、効果、愚劣さはさまざまあると思うのだが、実際、真剣に考えてみれば、一度匙が投げられた空間が、もう一度別の仕方で「生き延びている」ということは、どこか凄みがあり、驚きがある。

資金を投じて丸っと作り変えてしまうような場合や、スクラップアンドビルドでさらに大きなビルを建造するような場合においても、それぞれの巧拙、効果、愚劣さがあると思うのでここでは措く。川口洋子が今回かわることになった茨木市市民総合センター（クリエイトセンター）の喫茶店は、中の人が失踪したのかと思うほどに内装も家具も食器類もそのままに捨ておかれた状態にあった。彼女はここで展示をする。多くの人にとっては「小さく」取るに足らないが、作家にとってはいくぶん「大きい」事象を、「一つずつ」時間をかけて向き合っていくような場として利用する。「小さくて大きい 一つずつ」は、さしあたって川口の態度表明である。

川口は会期中のトークイベントで、「すべてが絵であるような」状態として空間を眼差しているようなことを語ってくれていたが、逆にいえば、彼女にとって、あの喫茶店のすべてがノートのような状態としてあったということでもある。キャンバスというよりはノートだと思う。ノートを美しく汚していく。傷をつけていく。光る傷をつけていく。電球に、ポスターに、しゃもじに、描線が引かれる。色が載せられる。散文的な映像が蛇口を開いたままのように流しっぱなしにされ、外では折紙の「編み飾り」のような立体物が風を受けて揺れている。

こう書いていくと、幼児が自宅の壁や家具に親の目を盗んで落書きをしたような印象を抱くかもしれない。際限なく興味が移り変わっていく工作の途中のように思われるかもしれない。だが、そうした「子供」らし

さとして展示を吟味することはどこか違うように思われた。むしろ、不意をつくように、私にとって川口の展示は「老い」について考えさせるものだった。だからこれは批評というよりは、もっと個人的なことに基づいた文章になる。

=

小学校低学年くらいの頃だったと思うのだが、父方の祖母から便箋に描かれた気球の絵をもらった記憶がある。私の父は早逝しているため、私と父の親族との関係は「父抜きで」結びつく不思議なものだったが、祖母は認知症であり、横浜戸塚の息子夫婦（父の兄）の家で介護をされていたこともあって、一層遠い不思議な存在であった。

3歳にもなる前に父を亡くした私に、父方の親族は会うたび父の思い出を話してくれた。しかし血のつながった実父とはいえ、ほとんど出会ったことがない（一切の記憶がない）身としては、像を結ぼうにも結べない、常にほつれた糸を手渡される感覚があったのも事実である。

認知症の祖母は父（先立った息子）の話を私にすることはなく、椅子に腰かけていて静かだった。私は手持ち無沙汰で、仏壇に備えられた金平糖や甘納豆の入った小瓶を眺めていた。といっても、私たち家族が住む家から横浜は遠く、訪れたのは年に一度か二度くらいの話である。

あるとき祖母は、筆圧の弱さを感じる薄い揺れた鉛筆の線で、縦に伸びた気球の絵をよこしてきた。元気で、とか、仲良くね、とか、そういった言葉が添えられていたと思うのだが覚えていない。とにかく今でも思い出すのは、ヒョロヒョロと伸びていく萎びた風船のような2、3センチほどの糸屑状の線である。

筆圧が落ちる、という感覚を私は本当の意味でわかっていない。手が震えるということもわからない。私はまだ、じゅうぶんに私の体を制御できている。不器用ながら、一応は意のままに動いている。それが一種の「手癖」や「慣習」となっているのも薄々はわかっている。長い棒の先

にチョークをゆわえるなどして絵を描く人たちがいるのもうなずける。  
できあいの運動の向こう側に行きたいのである。

そう、向こう側、なのだ。祖母の気球は、便箋に引かれた縦の罫線と罫線の幅をわずかにはみ出た程度のもので、紙のざらつきがわかるくらいに黒鉛は薄かった。写实的でもなく、お世辞にもうまいと言えるようなものではなかった。だが、昏くはなかった。萎んだ気球であり、延命、という感じがした。自分が知っている澁刺とした気球とは程遠かった。だが、昏いものではなかった。

=

「生命のありかを誤〔あやま〕たずに理解している人にとっては、病気や老いの際に生命が減少すると口にしたり、それを嘆いたりすることは、光に近づいてゆく人間が、光に近づくにつれて自分の影が短くなるというって嘆くのも同じことなのだ。肉体が消滅するという理由で、生命が消滅することを信じることは、物体が一面の光の中に入った後の物体の影が亡くなったことが、物体そのものの消滅の疑いない兆候であるということを信じることと同じなのだ。」（トルストイ『生命について』八島雅彦訳、集英社文庫、1993年、p.185）

トルストイの文章である。こういう文章は何か「救い」のために書かれているように感じるだろうか。どこか説教くさいと私も考えていた。老いや死を、減少や消滅として語るのではなく「生命を見えない未来へ移していく」ことだとして語ることに、優等生的な居心地の悪さを覚えていた。

しかしトルストイはどうも変なことを書いているのである。

「病気や、老いや、老衰や、耄碌は人間の意識と生命の消滅であると人は言う。どんな人間にとってというのだろうか。わたしは、言い伝えに従って、耄碌してしまった使徒ヨハネの姿を思い浮かべてみる。言い伝えによれば、彼は、兄弟たちよ、互いに愛し合いなさい、としか語らな

かったと言う。ほとんどからだのきかない百歳の老人が、目には涙をに  
じませ、歯のない口で、これだけのことしか口にしないのだ。互いに愛  
し合いなさい、と。このような人間のうちには、動物としての生存はほ  
とんど見られない――それはもう世界に対する新たな関係、つまり、人  
間の肉体的な生存という器にもはや納まりきらない、新たな生命の存在  
によって食いつくされているのである。」 (p.185)

「新たな生命の存在によって食いつくされている」とはすごい言いよう  
であるし、「老い」をこのように考えられるならば、言い換えれば、五  
体満足で頭も体も動く状態ではない人が「新たな生命の存在によって食  
いつくされている」と考えられるならば、あの気球の絵について何かわ  
かった気がしてくる。

=

コンセプチュアルアートを中心として「現代美術」という諸実践が形式  
化されて久しい。展示技術と呼ばれるものの水準の向上も著しい。作家  
の透徹とした純粹性、理知、想像力を最大限に達成する技術として、そ  
れはそれで研鑽されて良いと思うのだが（さらに言えば、映える展示も  
スマートフォンのシャッター音もまったく問題ないとさえ思うのだが）、  
それでも、想定されている主体が限定されすぎているという気がしてな  
らない。「老い」が看過されている。

川口の手つきは、たとえばそうした「展示施工技術が向上した昨今の水  
準」から照らしてみれば取るに足りないものとして見過ごされうるだろ  
う。だが、私が川口の展示のなかにいて好感を持ったのは、閉店した喫  
茶店に対してネガティブな感情を持っていなさそうな点にあった。作家  
は、喫茶店の「今際の際」に対する「抵抗」として介入しているのでは  
ない。もとより、彼女は自分の絵が雨に濡れても、それを「劣化」や「破損」  
として思考を止めることなく、じっと考え続けることのできる作家であ  
る（展示に際しての文章参照のこと）。

取りとめのない（小さくて）、だが作家にとっては反応せざるを得な

かった（大きい）映像の断片たちを眺め続けるのはかなり退屈であり、ほとんどは私のなかでは「小さい」存在のままで流れていった。自分は、光学的な状況に放逐されるのは元々苦手である。しかし、いつかは、キッチンの傍やフロアの隅に展示されていた映像のように、とっかかりを少しだけ覚えていて、忘れて、また次のちょっとしたとっかかりを覚えて、というかたちで、日々の輪郭を点描のように保つ日が来るのだろう、とも思う。作家はすでにそういう時間の覚え方を、散策の仕方を、身につけている。あれはひとつの認識であり、現実なのだ。

作家が湯を沸かし、レモネードを淹れてくれる。次はここで別の作家集団が展覧会をやる予定だと教えられる。作家は私と同世代で、お互いまだまだこれからという感じである。「老い」について書くなどまだ早すぎると思われるかもしれないが、これは昏い話ではない。一度匙が投げられた空間が、もう一度別の仕方です「生き延びている」ということは、やはりどこか凄みがあり、それを一つずつ、驚きたいのである。